

言語の本質：普遍性と多様性

児 玉 徳 美

1. 言語分析の対象

ことばを駆使できるのは、人間固有の特質であり、人間はことばを身につけてはじめて人間として思考し行動することができる。ことばの獲得には人間の可能性や限界をもたらす生得的な能力と生後の経験を通して習得される知識が交錯している。その点、言語を考察することは言語を通して人間がどのような存在であるかを示すものでもある。言語が人間のあらゆる営為にかかわるとすれば、言語分析は言語活動の全域を対象とし、人間のあらゆる営為の届くものでなければならない。本論は言語習得とかかわる言語分析の対象、言動の基底にある人間の知識、人間が日常用いる言語に抱いている言語観の3つの課題について考察する。この3課題は言語の本質にかかわるものでもある。考察の目的はこれまであちこちで散発的に論じてきたものを3つの課題の中にまとめ、言語の全体像を見渡せる俯瞰図を提示するとともに、言語活動や言語分析のあり方を論ずることにある。各課題の詳しい分析については参考文献を挙げるだけにとどめる。

人間を含む動物のふるまいを生み出すものとして次の要素が想定される。

- (1) a. 生得的能力を支配する遺伝子
- b. 社会経験の基礎となる環境
- c. ふるまいを生成構成する一般原則

(1a) は生まれつき動物の種を区別するもので知力・感情・運動能力などあらゆる活動の基礎にあり、(1b) は同じ種においても社会や個人のふるまいに違いをもたらし、(1c) は(1a,b)の生得的遺伝子や環境を構成する諸々の下位要素が相互に交錯しながら人間や動物のふるまいを決定する法則である。人間の言語に即していえば、(1a) は人間と動物を区別する生得的な言語能力を司る遺伝子であり、(1b) は社会や個人の言語活動に違いをもたらす環境であり、(1c) は人間の認知能力・思考・価値観・行為などともに言語表現を生み出す法則である。

言語は記号の代表的なものであり、人間の思いや知見からなる意味とそれを表す形式（つまり音声や文字、あるいはその連鎖）が一体のものとして結合したものである。両者の結びつきは恣意的である。日本語の「ヒツジ」は英語で *sheep*、フランス語で *mouton* と呼ばれるが、日本語で「羊」を「ヒツジ」と呼ばなければならない必然性はない。だからといって意味と形式がでたらめに結びついているわけではない。日本人100人が「ヒツジ」と発音した場合、正確には100通り異なる発音からなるが、ほぼ100人の聞き手が「ヒツジ＝羊」と解釈し、「イヌ＝犬」「ネコ＝猫」と解釈することはない。

言語記号としていったい何が「ヒツジ」を「羊」として成立させているかが問題となる。言語は

何を反映実現し、何によって創発されるのであろうか。言語習得とかかわって 20 世紀に言語は次の 2 種に大別された。

- (2) a. 言語記号の型としてのタイプ (type) : ラング (langue)、言語知識 (competence)
 b. タイプの具体的現れとしてのトークン (token) : パロール (parole)、言語運用 (performance)

上記のうちラングとパロールは Saussure (1916) の用語であり、言語知識 (competence) と言語運用は Chomsky (1965) 後の生成文法での用語である。(2b) のトークンとしてのパロールと言語運用はともに (2a) のタイプを前提にし、個人が発するものでタイプが具体的な場で使用される言語表現である。タイプは記号の原型とも呼ばれ、言語経験において具体的な場でトークンに接しながら習得される抽象的な知識である。例えば「ヒツジ—羊」という音声 (形式) と意味が結合したものに対して日本人が共有している知識である。(2b) のトークンは言語習得のきっかけとなる記号であるが、正確には個人差もあるため、言語学の対象となるのは (2a) のタイプとみなされた。

(2a) と (2b) についてその違いをもう少し詳しくみてみよう。(2b) のトークンには語句の場合、確かに地域・年代・個人によるなまりなど形式上の変種やイメージ・含意など意味上の変種があり、不注意や記憶違いなどによる文法上の誤りも時にみられる。しかし具体的な場で交わされる言語活動においてトークンに含まれる言語表現は語句に限らない。むしろ文や文を連ねて言説 (discourse) からなるほうが多い。言語表現が文から言説へと拡大するにつれて現実世界についての百科事典的情報などの非言語的知識が増大する。非言語的知識には社会や時代の価値観・要請・利害・制度などにかかわる知識も含まれる。さらに言語表現の背後には話し手が意識的・無意識的に語ることを避けていることがらもある。(2b) は形式上はタイプをモデルにした具体例であるにしても、意味上は文脈上多様な要因に由来する意味が埋め込まれている (詳しくは兎玉 2013 第 2 章 1 節参照)。

(2b) のトークンに属するパロールや言語運用はいずれも具体的な場で発せられる語から文・言説に至る言語表現に用いられ、両者の間に実質的な違いはない。しかし問題点は言語学が対象とする (2a) のタイプにある。第 1 の問題点は (2a) に属する言語知識の langue と competence の違いにあり、第 2 の問題点は (2a) の対象範囲が (2b) のトークンより狭く、(2a) が (2b) のモデルになりえない点にある。先ず前者の問題点からみていく ((2a) のタイプは広義の言語知識を示すが、langue と competence が何を言語知識とみなすかの点で異なるため、ここでは両者をそれぞれ原語で示すことにする)。

- (3) a. langue : 社会的約束事として言語共同体員に共有される言語知識、個別言語が歴史的に形成し個人が生後の経験を介して習得する知識、言語共同体固有の多様性がある。
 b. competence : 記憶の制約や言いまちがいのない理想化された話し手・聞き手の言語知識、生得的な言語能力、モジュールをなす言語の普遍性がある。

(3a,b)ともに心的実体としての抽象的な言語知識である。langue は生後の経験を介して言語共同体員に共通して習得される知識であるが、言語共同体ごとに固有な知識であり、多様性に富むのに対して、competence は langue より抽象度が高く、理想的な話し手・聞き手を想定して人間がなぜ言語を駆使できるかの問いに答えるかのように、言語を形成する法則を含め、言語固有の原素的な知識であり、その法則には多くの普遍性がある。langue が生後の経験を介して (1b) のトークンに接

する中で徐々に抽象度の高い (1a) の言語知識を習得するのに対して、competence は生後に (1b) のトークンを介して言語の刺激を少し受けるだけで人間に埋め込まれている生得的な言語能力が開花するものとみなされている。

(3a,b) は内容上大きく異なるが、文を構成する言語知識が言語活動の基礎をなすと考える点で共通している。確かに言語活動は形式上主部・述部からなる文の繰り返しといえる。しかし意味上は文の単なる繰り返しとはいえない。ここに (3a,b) = (2a) が意味上 (2b) のモデルになりえないという第2の問題点がひそんでいる。例えば「太郎は16歳の少年である」の次にどのような文が続くかは誰にもわからない。文と文がどのようにつながり、文連鎖が具体的な文脈との関係で文内の語句の意味をどのように限定したり拡大するのか、話し手が文連鎖の中で自分の思いのうち何を語り何を語らないか、などは文内の意味と異なる質のものであり、文を超える言説の中ではじめて明らかになる（文と言説の違いについては児玉（準備中）参照）。さらに (2b) で述べたように、言語表現が拡大するにつれて言語表現は非言語的知識からなる言外の意味と深くかかわってくる。

言語学が (2b) の全域でなくその一部にすぎない (2a) = (3a,b) の言語知識のみを対象にするとなれば、言語分析は言語の全体像から遠ざかることになる。(2a) = (3a,b) は現実の言語活動を表す (2b) の意味範囲と異なり、(2b) を映す意味上のモデルになりえないためである。(3a,b) は文を最大の分析対象とした結果、形式上はともかく、意味上は (2b) のパロールや言語運用に埋め込まれている広範な領域を扱えなくなっている。この食い違いは当面客観的に捉えやすい形式を重視し、客観的に捉えにくい意味を形式の解釈的なものとして分析の中心から意味を除いたことから生まれている。これは本末転倒である。言語は形式を伝えるために意味が存在するのではなく、話し手の思いや主張からなる意味を伝えるために形式が存在するものである。

意味上 (2a) の内容を示す (3a,b) と (2b) とのズレは langue より competence のほうが大きい。(3a) の langue では言語が社会的約束事や生後の経験に基づく知識であると規定しており、言語と言外の社会文化とのつながりがある程度うかがえる。これに対して competence は純粋に言語の特質にのみ特化しているため、言外の社会文化とのつながりが無視されている。生成文法は当初 (3b) の competence が (2b) の言語運用のモデルになると考えていたが、現実には competence を対象とする文法のモデルが言語運用のしかるべきモデルになりえないことが明らかになってきた（詳しくは児玉 1987:82-84 参照）。これも当然の結果である。言語学が (2b) とのズレを解消するためには、形式と意味の峻別と両者の相互依存関係の考察、文を最大の分析単位とする言語構造の見直し、文脈に由来する言外の意味を含めた意味の全体像の構築が望まれる。(2a) と (2b) の対象範囲にズレがあるとすれば、せいぜいいえることは言語にはタイプのものとトークンのもの、あるいはラング的なものとパロール的なもの、competence 的なものと performance 的なものがあるというあいまいな主張にとどまる。

1970年代には Saussure や生成文法にみられる (2a,b) の二分法を否定する言語理論が生まれ、言語分析の対象として、あるいは言語を創発させるものとしてラングや competence に代えて次のような主張がみられる。

(4) 認知言語学

言語は生後の身体的経験に基づく一般的な認知能力に動機づけられた要因に由来する。

(5) 関連性理論

人間の認知は関連性が最大になるようにできており、発話に際して関連性の高い解釈を選ぶ発話解釈過程というモジュールが人間に生得的に備わっている。

(6) 選択体系機能言語学 (別名: 体系文法)

言語は社会の必要性を満たすためにあり、社会体系が意味体系に実現され、意味体系が語彙文法構造などの言語形式に実現されるとし、言語と社会的脈絡との関係を重視している。

(4) の認知言語学は認知優先説の観点から言語能力と認知能力一般との共通面に着目し、言語の非モジュール性を主張し、経験に基づく用法依存モデル (usage-based model) を提唱している。言語のモジュール性を主張する生成文法や (5) の関連性理論から「経験論への先祖返り」という批判もあるが (今井・西山 2012:29 参照)、認知言語学は (3a) の言語知識 (competence) が生得的に人間に備わっているとすることで満足せず、背後には一般的な認知能力や (2b) の言語運用 (performance) が関与しているとする Lakoff らの生成意味論のパラダイムを継承している (山梨 2004:3 参照)。認知言語学と関連性理論はともに人間の認知に基づく理論と銘打っているが、認知能力と言語能力の二者にモジュール性や生得性を認めるか否かの点で認知の中身が大きく異なる。(6) の選択体系機能言語学のように言語の社会性を重視すべきという主張は社会言語学者の Firth、Bernstein などのロンドン学派 (児玉 2010:188 参照) と共有し、その後 Fairclough などの批判的言説分析 (CDA) (児玉 2008:43 参照) に引き継がれている。

Saussure のラングとパロールの二分法の矛盾にいち早く気づいた時枝 (1941) は両者を合体したものとして言語表現を心的過程とする言語過程説を唱え、主体的行為の同一性が社会性に由来すると述べている。彼のいう心的過程・主体性・社会性などは (4) - (6) の言語理論にも通用する先見性があるが、(4) - (6) より 3・40 年前の提案であり、多くのあいまいさもある (詳しくは児玉 2008:47、2013 第 1 章参照)。

(2) (3) の Saussure や生成文法が記号としての形式と意味の結合や言語の形式である音韻論・形態論・統語論を重視しているのに対して、(4) - (6) の言語理論はいずれも意味に焦点を当てている。(2) (3) が対象とする最大の言語単位が文であるのに対して、認知言語学や関連性理論が対象とする意味分析は主として文であり、時に文を超える場合があるにしても、隣接する 2・3 の文の連鎖にとどまる。言語と社会文化の関係を重視する選択体系機能言語学は文内の構造を分析するとともに一連の文からなる言説を時に対象とし、CDA は通例言説のみを対象としている。

焦点の置き方が異なる多様な言語理論が競合する中で個人の主張もその時どきの成果を反映して変化する。例えば Slobin (1973) は言語習得との関係で非言語的概念を前提にして言語が習得されるという認知優位説をとっていたが、Slobin (1985) は文法標識が生得的に幼児に備わっている普遍的な意味原理に支配されるという生得論を唱え、Slobin (2001) は幼児が編み上げ靴の紐を下から順に編み上げていくように、言語発達初期に習得した数少ない形式と意味の類型を足がかりに順次類型を引き上げて複雑な言語を習得するというブートストラッピング (bootstrapping) 説を主張した。この主張は現実の経験に基づき言語の形式と意味のつながりを広げて言語による世界の区切り方が概念をつくり上げるという言語優位説に属し、用法依存説とも呼べるものである。Slobin (1973) は認知言語学に、Slobin (1985) は生成文法に共鳴し、Slobin (2001) は現実の用法を重視する点で認知言語学と共通しているが、言語と認知のいずれの習得が先行するかという点で認知言語学と逆の立

場にある。

競合している言語理論は互いに交錯し混迷しているかにみえるが、1970年代より意味に焦点が当てられる中で、多様な用語のうち次の対を区別することの重要性が明らかになってきた。

(7) a. 概念化能力

社会における経験を多様に解釈し言語化する、人間の普遍的な能力である。

b. 概念体系

個別言語の言語表現・フレーム・価値観・推論過程において無意識的に抱かれる一連の概念の枠組みである。

(8) a. 意味解釈過程

たとえ語義や比喩などの意味が未知であっても文脈に基づいて意味を解釈する概念化能力の一種。そこには一貫性・関連性などに基づいて解釈する人間の普遍的な言語能力が働いている。

b. 意味獲得過程

個別言語が歴史的に形成し、個人が生後の経験を介して習得する概念体系をつくるもの。そこには個別言語固有の多様性があり、個別言語の語義発達や語連結などに論理必然性は存在しない。

(7a) (8a) は各言語理論で論じられる言語の普遍性を支え、(7b) (8b) は言語の多様性を支えるものである ((7a,b) の違いについて詳しくは児玉 1998:106-108、(8a,b) の違いについては児玉 2013 第4章 2.3 節参照)。辞書編集者の中には特定言語の語義配列に没頭するうち、語義の歴史的発達順序がさも論理必然的であるかのように論ずる者があるが (児玉 2010:118 参照)、これは個別言語の (7b) (8b) を言語普遍的な (7a) (8a) と混同したことに由来する (個別言語の語義獲得と類似の関係が個別言語の構文獲得過程にもいえるはずであるが、ここでは指摘にとどめておく)。(4) - (6) の言語理論にみられる分析の違いは (7) (8) において強調点や重点の違いからきている。認知言語学は (7a,b) を、関連性理論は (7b) (8a) を、選択体系機能言語学は (7b) (8b) を重視している。

これまで普遍性・生得性と多様性・生後の経験が対立するかのよう論じてきたが、普遍性は生得性の「専売特許」ではないし、多様性も生後の経験の「専売特許」ではない。普遍性には生得的なものだけでなく、同じ地球環境での経験から生まれたものもある。その中には意味範疇 (動物・植物、人・男・女、羊・犬・猫などの範疇形成)・時空概念 (天・地、広・狭、前・後、過去・現在・未来など)・比喩などの普遍性がある (児玉 2006:22 参照)。逆に人は無数の神経回路をもって生まれるが、その多くは使用しないと数年のうちに死滅するといわれている。例えばある特質が生後の経験の中で意味を合図する記号として音韻上差異対立をなさない場合、その特質を区別する生得的言語能力が失われていく。日本語で「l」と「r」の区別がなくなり fly と fry が同じように扱われるのもこのためである。個別言語で言語上差異対立をなすものとして利用している神経回路は、人間が本来もっている普遍的・生得的な言語能力を担う神経回路のごく一部にすぎない。

多様性といっても、無縁のもの集合ではない。何らかのつながりがある。(8b) の意味獲得過程に多様性があると述べたが、例えば A と B が結びついた場合、その結合は無数に存在する類縁関係の一例にすぎない。その結合に必然性はないが、ゆるやかな何らかのつながりはある。このゆるや

かなつなかりが多様な類型化を形成していく。

記号が繰り返し使用される過程で記憶力も手伝って記号効果が生まれる。記号効果は形式と意味の結合を確かなものとし、個別言語の音韻体系とともに、(7b) の概念体系、(8b) の意味獲得過程、あるいは言語類型を形成している。例えば個別言語が衛星フレーム言語に属するか動詞フレーム言語に属するかの区別は生後の経験を通して幼児の早い時期に習得されるといわれている（詳しくは児玉 2002:7 参照）。言語の形式と結びついた意味が言外の社会文化とも密接に関係しているとすれば、生後の経験の中での記憶力は言外の人間の行動や社会文化的現象の認識にも同じように働いているはずである。言外の現象認知と言語習得が記憶力や記号効果を通してどのような関係にあるかも今後重要な課題となる。

一般論として普遍性と多様性、生得性と後天性、言語的知識と非言語的知識の間には大きな隔たりが存在し、互いに対立するものでもある。しかし細かくみると、対をなすそれぞれの特質には大きな幅があり、対をなす幅（領域）が接触するところでは対の区別が判然としないものもある。個別現象は広い幅の一部を選択したものにすぎない。個別現象を論ずる場合、一般論の対立概念を強調することは、対をなす接触領域から離れた領域の特質を強調することになり、有害無益なこともある。むしろ重要なことは個別現象にみられる個々の特質が機能する領域と機能しない領域を峻別し、諸特質をつなぐ因子を明らかにすることである。その点、言語理論が唱える (2) - (6) の主張はそれぞれ言語が部分的に有する特質であり、言語はそうした特質を併せもっているのかもしれない。例えば生成文法・関連性理論と認知言語学の生得論と経験論は一見両極をなす主張かにみえるが、先ほどみたように、普遍性と多様性がそれぞれ生得性と生後の経験の「専売特許」でなく、領域によっては生得論と経験論の主張は見かけほど離れているわけではない。3つの言語理論はいずれも（広・狭義の違いはあるが）認知と言語の関係に焦点を当てている。これと対照的に選択体系機能言語学は認知より社会性に焦点を当てており、他の3つの言語理論と大きく異なる。

かつて Chomsky (1993:15) は研究が専門化することにより小手先の処理に腐心するあまり、しばしば洞察ある課題から目をそらすことになり、専門化は必ずしも進歩の証でないと述べた。しかし皮肉なことに、今日多くの言語理論は Chomsky (1957) 後ますます専門化の方向に向かい、文を最大の分析単位とし、自分の信じる理論にのみ没頭する閉塞状況に陥っている。文で終る言語活動はむしろ稀である。言語活動が一方で人間の生得的言語能力に由来し、他方で社会文化の影響を受けるものであるとすれば、言語理論こそ幅広い分析対象と柔軟な分析方法が求められる（分析対象と分析方法の拡大について詳しくは児玉 2013、文と言説の違いについては児玉（準備中）参照）。

2. 人間の知識

人間はことばを介して知識を蓄積し、よくも悪くも現代の文明をつくり上げてきた。かつて Chomsky (1988a,b) は人間の知識について次のような特徴があることを指摘した。

(9) a. プラトンの問題

人間は限られた証拠（経験）しかもたないのに、なぜこれほど多くのことを知りうるのか。

b. オーウェルの問題

人間は多くの証拠（経験）をもちながらも、なぜこれほど少しいたことしか知らないのか。

c. デカルトの問題

人間は知識や能力をなぜ創造的に（外的刺激がなくても自由に）使うことができるのか。

(9a) は教えてもらわないことも身につけることができる人間が生得的に有する能力に由来し、(9b) は (9a) と逆の問題であり、人間は多くの経験をもちながら過去と同じ誤りを犯すこともあり、社会の中で体得する知識の限界を示し、(9c) はデカルトの心身二分論とも関連し、人間が動物と違って外的刺激がなくても自由にふるまい、芸術上独創的な作品を作ることもあれば、極悪非道な行動もととり、自らの視点や動機の違いからしばしば多様な反応を示す。(9a,b) は人間の能力には得意な領域と不得意な領域があることを示し、(9b,c) は人間のふるまいが普遍的・合理的なものだけでなく、独創的・恣意的・自己中心的なものが混在し、多様性に富むことを示している（児玉 2010:11 参照）。人間が関与する人文社会現象が自然現象と違ってすべて複雑系現象に属する最大の原因も、(9a-c) の人間の知識・能力がもつ複雑さに由来している。

(9a-c) の知識はそれぞれ人間のふるまいを生み出す要素の (1a-c) に対応する。言語に即していえば、言語知識や言語構造を分析する (2) - (6) の言語理論が多様に分かれるのも、人間の知識が (9a-c) のように多様な特質をもつためである。言語に普遍的特質があり、幼児の母語習得が容易であるのは (9a) に由来し、言語表現に多様な方言・なまり・言いまじりなどがあり、大人の外国語習得が困難になるのは (9b) に由来し、人間が場面に応じて、あるいは場面と無関係に新たな文や言説を無限につくり出すことができるのは思考とも関連し、(9c) に由来する。

言語を介して蓄積された知識は人類がこれまで築いてきた文明にどのようにかかわってきたのであろうか。言語が文明に果たした役割は大きく言語状況の変化が歴史的に新しい時代をつくってきたともいえる。

(10) a. 言語の獲得 (?)

b. 文字の発見 (約 3000 年前)

c. 印刷機の発明 (15 世紀)

d. 「メディア革命」(20 世紀末より)

人類がいつ言語を獲得したのかという問題 (10a) は、人間の歴史にとって興味ある問題であるが、今では想像の世界であって確認のしようがない。かつて Vendryes (1921) はその著書の冒頭で「言語の起源を論ずるのは言語学の仕事でない」と述べた。言語の歴史をどれほど遡ってみても経験科学として言語学にとって必須である確かな証拠が見出されないためである。最古の記録を発見し研究したにしても、記録の前にさらに長い言語の歴史があったはずである。記号のあり方から、あるいは幼児の言語発達から原始言語を再建しようとする試みも、しょせん空想の域を出ない。また言語の起源が一箇所であったか複数個所であったかという議論が時にあるが、この問題もあまり意味がない。歴史的には人間の脳が言語を用いるのに十分なだけいつ発達し、知力がどう進化したのかということが重要である。言語起源論は、Vendryes (1921) と同じように私自身、確かな証拠を見出せないため経験科学になりえないと考えるが、坂本 (1991:214) は新しい認識論を建設することにより今や「科学としての言語起源論」を構築すべきと主張している。坂本にとっての「科学」の基

準は経験的証拠の有無ではなく、脳がいかに関達し知力がどう進化したかを説明する認識論に妥当性や説得力があるか否かにある。言語起源を直接証明する経験的証拠は存在しないが、言語を駆使する人間の脳や知力がどのように関達したかについての証拠は部分的に存在する。坂本(1991)のような研究は経験的証拠が乏しく、経験科学として不完全であるが、決して無意味なものではない。ここでは人文社会科学として「科学とは何か」が問われることになる(これについては兎玉(準備中)参照)。

文字の発見(10b)により文字はそれぞれの時代の記録を次の世代に伝え、後世の社会に大きな影響を与えてきた。白川(2002)とJaynes(1976)が対象とした文字はアジアとヨーロッパに分かれるが、二人は共通して文字が人々の意識に大きな変化をもたらしたことを論じている。古代社会の人間にとってことばは呪能や神託を介して全知全能の神の声を伝えるものであったが、今から3000年ほど前、文字が盛んになった頃いつの間にか神の声が消え、人間の意識が芽生えていったという(兎玉2010:74参照)。文字の発見とともに人間の意識が芽生え、神の呪縛がとかれ、人間自らの思考が次第に強くなっていった。

15世紀の印刷機の発明(10c)は中世から近代への幕開けでもあった。活字印刷術の普及が15・6世紀のルネサンスや宗教改革を先導し、さらには18世紀の産業革命後の工場制度や一般大衆の教育や都市化を促した。印刷機の発明がことばを通して知識の共有化を可能にしたためである。

テレビ・ラジオ・新聞・雑誌・放送など、20世紀に盛んになったメディアとともに、今日ではマス・メディアでない個人や団体自ら発信できるソーシャル・メディア(ブログ・ツイッター・フェイスブックなど)やiPhone、iPad、スマートフォン、携帯電話などが加わり、「メディア革命」(10d)とも呼ばれている。メディアということばの意味合いや役割が大きく変化し、新しい情報化時代を迎えている。メディアを通じて得る情報がこれまで知らなかった世界を教え、多様な価値観やサブカルチャーを生み、政治体制を含む現状の秩序を動かすこともある。あるいは情報が過剰になり、多くの人が同じ情報を共有することが困難になった結果、同じ好みや意見・情報をもつ仲間だけが集まり、社会が分断されることもある。さらには情報には偽りや中傷も含まれ不毛な混乱が生じたり、通信システムの心臓部ともいえるコンピュータを破壊するサイバー攻撃が公的機関や民間グループによってなされている。今日、社会や個人が自由に情報を受信し発信できる機器をはじめて手にしたが、それを使いこなす知恵やルールはまだ確立していない(情報化時代の光と影については兎玉2013第8章参照)。

今日、過剰な情報は情報・思考・知識の相互役割まで変質させている。情報・思考・知識の三者は常に同じようにふるまうわけではない。まして等号で結ばれるものではない。人間の言動において三者の関係は時代・社会・個人により、あるいは状況により異なる。それまでに蓄積した知識や思考を重んじ、その時どきに入る情報を一時的なものとして軽んじたり、逆に外部からの情報を(指令として)重んじ、思考や知識を軽んじたりする。もちろん、この中間も存在する。人間の知識としては(9a-c)のうち、特に(9b, c)が情報化時代の影響を強く受けている。(9b, c)の知識はかつては言語や見聞による乏しいながらも新しい情報に接し、人間固有の思索や思考を重ねて蓄積したものであり、その知識がよくも悪くも人間のふるまいを形成していた。ここでは情報・思考・知識が比較的強く結びつき、その中心に言語が位置していた。しかし情報化時代には多様な情報が容易に入手可能となり、個人の好みや関心から個人が利用する情報は多様に異なるが、新しい情報に価値を認め、他者に先んじて新しい情報を求めている。今日では外部から入る新しい情報が主役と

なり、かつて言語を中心に共有された情報・思考・知識の結合は弱くなっている。

人は情報に振り回され視聴覚優位の時代相に圧倒されて、多様な情報を伝える言語は見かけや自らの欲求を満たすためだけの手段と化している。世界には昔と変わらぬ矛盾・不条理・不公正などの社会問題が存在するが、弱者の声はどこにも届かずことばだけが宙を舞っている。ここでは言語と人間のつながりまでも消えようとしている。情報のみに誘導される言動の判断基準は表層的・即物的・感覚的・受動的になってくる。言語の空洞化は抽象化や想像力を必要とする思索を敬遠し、思考や知識の弱体化を招くことにもなる。情報化時代には多様な情報を手がかりに模倣したり古い秩序を破壊することが比較的容易であるが、新しい秩序をいかに構築するかは容易でない。構築の仕方は情報の中に含まれていないためである。多様な情報を手にすることができる今、情報・思考・知識の結びつきをいかに立て直すか、その過程で三者を結びつける言語の役割や価値観を新しい時代に対応していかに再建するかが最大の課題といえる。

3. 言語観

日常生活で無意識に言語を使い、その存在を日ごろ意識することがないだけに、言語とは何かと問われると、答えに窮することもある。言語の特性や役割などについての見方は様々であり、言語観は言語共同体や個人、あるいは時代によっても違ってくる。言語観の違いは言語へのこだわりや無頓着や不信を生んだり、特定の間観や世界観と結びついたりする。

古代ギリシャにおいて言語はロゴス (logos) であり、ロゴスは理性・論理でもあった。言語と論理を不可分とみなす言語観はキリスト教世界に受け継がれていった。次はヨハネ伝の冒頭の一節である。

- (11) 初めにことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった。ことばは初めにことばと共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。このことばに命があった。そしてこの命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

ロゴス (ことば) は神と共にあり、暗闇を照らす光であり、ロゴスには論理・理性・真理・ことばが一体のものになっている。

(11) が示唆する言語神授説はともかく、言語と論理・理性を不可分とするロゴス観はヨーロッパで生まれた学問・思想・世界観の基底にある。哲学・論理学・修辞学・合理主義・普遍論－唯名論・実在論－観念論など、すべて真理のあり方を求めてロゴスのあり方を探っている。欧米においては20世紀に言語を軸に新たな論争が展開されている。Rorty (1967) は言語哲学の隆盛をうけ、「言語論的展開」と題して「哲学上の問題は言語問題である」と論じた。Foucault (1971) 後の言説分析は「社会問題は言語問題である」と主張している。いずれも世界がことばで表現されるとともに、あるいは表現されるというよりも、ことばが世界を形成するとみなしている。

ロゴス観の対極にあるのが、古くから日本において言語を論理や真理と一体のものともみなさない離言真如の言語観である。河合 (1996,2003) によると、ことばに依る区別は依言真如であるが、こと

ばを離れた離言真如こそ一番深いところにある、つまり真如に最も近い世界は仏教が教えているように、ことばを超えたところにあるという（児玉 2006:106-108 参照）。離言真如という用語こそ用いないが、言語や論理に懐疑的な言語観は日本に多くみられる。

- (12) ディベートで論理力を養う、という趣旨は理解できないわけではない。しかし、論理性のみを最上の価値とするのでは、コミュニケーション能力養成のトレーニングとしては限界がある。論理には抜け道が多くある。

——齊藤 (2004:9)

- (13) (人は) 論理で世界を理解しようと、思っていない (し)、必要を感じていない。

——養老 (2005:60)

- (14) 英語圏の人たちの言葉による意思表示に関しては、若い時代の私はむしろ魅力を感じたのだが、さて何十年かを生きてきてみると、言葉によって相手を説き伏せる快感は、次第にむなしさにとって代わってしまった。・・・完全無欠な論理を使って相手を納得させるということがあり得るのだろうか、疑問は次々に湧いてくる。・・・こんな観点から言葉を考えると、これが西欧的な見方によれば実にあいまいな日本の言葉が妙に魅力的になってくるから不思議だ。

——大庭 (2005)

(12) - (14) は共通して論理の限界を指摘している。河合 (2003) によると、近代科学の世界観は物事の因果関係や責任を論理的に明確にし、物事を一義的に把握しようとしているが、現実はずっと多義的であり、区別立てをしない「あいまいさ」こそ 21 世紀の世界を解く鍵であると考えている（こうした考えは西洋の近代哲学が自己と世界を対立するものとして捉え、自己や自我を基準に世界を見るのに対して、東洋の思想は自己と世界が相補的な関係にあり、2つのものが区別なく溶け合っているとみなす西田哲学とも共通している。詳しくは児玉 2013 年第 6 章参照）。論理に代わる「あいまいさ」への魅力や信仰は (14) の大庭 (2005) にもみられる。こうした考えの背後には論理性だけでなく感性を含む人間観、自他一如、自然を含む主客未分化の世界観、過去・現在・未来をつなぐ死生観など、物事の境界を不鮮明にした全体性への志向が交錯している（児玉 2010:128 参照）。

言語に対する懐疑は日本に限らない。ロゴス観の強いヨーロッパにおいてもことばを超えたところに言表を超えたものを求めて苦闘した者の中にはヴィトゲンシュタインやリルケ、カフカなどの哲学者や文学者が多い。若くして筆を絶ち沈黙に向かったヘルダーリンやランボーなどもいる（詳しくは Steiner 1967:31-76 参照）。ニーチェが 19 世紀に「神は死んだ」と述べて久しい。これは神とともに言語への不信でもある。その後、20 世紀には戦争の蛮行やそれを弁護する政治の欺瞞が続き、さらに今日の視聴覚メディアの隆盛の中で、言語はますますその活力や正確さを失いつつある。人間と動物を区別する標識ともいえる言語への不信は人間の墮落をも示唆している（児玉 2013 第 9 章参照）。ヨハネ伝は (11) でみたように「初めにことばがあった」とことばの力を声高らかにうたっているが、終わりがどうなるかについては何も語っていない。

世界がグローバル化した今日、言語の力への懐疑はどこも同じ状況にあるが、ロゴス観と日本の言語観では、その対応において基本的な違いがみられる。前者は言語への不信から言語の再構築をめざしている。Rorty (1967) や Foucault (1971) 後の言説分析が 20 世紀後を言語の世紀とみなし、言語を軸に哲学や社会問題を論じているのもその現れである。これに対して後者は言語への不信か

ら言語を超えた世界に真実を求めたり、あいまいさこそ世界を解く鍵と考えている。この方向はグローバル化した世界に必要な説明責任・論理・説得・相互理解に逆行することになる。あいまいな言説からは何も生まれない。いくら論議を重ねても多様な視点が示されるままに終り、議論の積み重ねによる合意に至らない。その背後には離言真如につながる言語への不信がある。そのため日本では歴史認識・憲法改正・(脱)原発などの基本問題において昔と同じ論議が蒸し返されることになる。このあいまいな言説を克服して、全体性への志向からロゴス観に代わって世界を納得させるような新たな思考法や世界観はまだ提示されていない。確かに完全無欠な論理は存在しないし、言語や論理には人間のもつ知力の限界や独善的な性向が含まれる。しかしこの限界や独善性を見極めるには、残念ながら言語を介する以外に方法がない。言語からの離脱・脱却は許されないし、日本(語)に特徴的なあいまいな「言説の秩序」から新しい道が開かれるとは期待できない。

本論は言語にかかわる基本的問題の3題を論じてきた。第1は言語を誘発させている意味を中心にした言語分析の対象であり、第2は言語知識を含む言動の基底にある人間の知識であり、第3は論理や真理との関係で言語に抱いている言語観である。本論の第1の目的は言語の全体像を捉えるため3題の特徴を明らかにすることであった。3題にはそれぞれ普遍的な特徴と多様な特徴が交錯している。従来、普遍性と多様性はそれぞれ主として人間に付与された生得的能力と生後の経験に直結させて論じられることが多かったが、両者は必ずしも対立するものではなく、特にその境界領域では両者の区別が判然としないものがあることが明らかになった。

本論の第2の目的は3題の特徴を前提にしたうえで、日常の言語活動や言語分析がどうあるべきかを問うことであった。「メディア革命」と呼ばれる情報化時代の新たな段階を迎えた今日、情報に流され支配されないためには、2節の末尾でみた情報・思考・知識の結びつきをいかに立て直すかの課題があり、離言真如に代表される日本の言語観を見直しあいまいな「言説の秩序」から脱却するためには、3節でみた多様な要素からなる全体性への志向という日本固有の思考法を他者が納得できるようにいかに説得的に提示するかの課題が残されている。前者の課題は世界共通のものであり、後者の課題は独自の言語観をもつ日本に特に課せられるものである。言語分析が上記の課題に応えるためには、1節でみたように、分析対象を文内構造から言説にまで拡大し、形式よりむしろ意味を重視した分析を進めることが求められる。

引用文献

Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.

Chomsky, N. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, N. 1988a. *Language and Problems of Knowledge*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, N. 1988b. *Generative Grammar: Its Basis, Development and Prospects*. Kyoto: Kyoto University of Foreign Affairs.

Chomsky, N. 1993. *Language and Thought*. Wakefield: Moyer Bell.

Foucault, M. 1971. *L'ordre du discours*. Paris: Gallimard. [中村雄二郎(訳)『言語表現の秩序』1972、東京：河出書房]

今井邦彦・西山祐司. 2012.『ことばの意味とはなんだろう 意味論と語用論の役割』東京：岩波書店.

Jaynes, J. 1976. *The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind*. [柴田裕之(訳)『神々の沈黙：意識の誕生と文明の興亡』2005、東京：紀伊国屋書店]

河合隼雄.1996.「日本語と日本人の心」大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎(著)『日本語と日本人の心』1

- 70, 東京：岩波書店.
- 河合隼雄. 2003. 「曖昧さと『私』」 河合隼雄・中沢新一（編）『「あいまい」の知』1-15, 東京：岩波書店.
- 児玉徳美. 1987. 『依存文法の研究』東京：研究社.
- 児玉徳美. 1998. 『言語理論と言語論——ことばに埋め込まれているもの』東京：くろしお出版.
- 児玉徳美. 2002. 『意味論の対象と方法』東京：くろしお出版.
- 児玉徳美. 2006. 『ヒト・ことば・社会』東京：開拓社.
- 児玉徳美. 2008. 『ことばと論理——このままでいいのか言語分析』東京：開拓社.
- 児玉徳美. 2010. 『いまあえてことば・言語分析・言語理論のあり方を問う』東京：開拓社.
- 児玉徳美. 2013. 『ことばと意味』東京：開拓社.
- 児玉徳美（準備中）「文と言説」（『英語語法文法研究』20号に掲載予定）
- 大庭みな子. 2005. 「心を繋ぐ言霊をもった言葉」『言葉の力』（『文藝春秋』3月臨時増刊号）54-56.
- Rorty, R. 1967. *The Linguistic Turn*. Chicago: University of Chicago Press.
- 斉藤 孝. 2004. 『コミュニケーション力』東京：岩波書店（岩波新書）.
- 坂本百大. 1991. 『言語起源論の新展開』東京：大修館書店.
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot.
- 白川 静. 2002. 『漢字百話』東京：中央公論社（中公文庫）
- Slobin, D.I. 1973. 'Cognitive Prerequisites for the Development of Grammar,' C.A. Ferguson and D.I. Slobin (eds.), *Studies of Child Language Development*, 153-208. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Slobin, D.I. 1985. 'Crosslinguistic Evidence for the Language-making Capacity,' D.I. Slobin (ed.) *Crosslinguistic Study of Language Acquisition Vol 2: Theoretic Issues*, 1157-1249. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Slobin, D.I. 2001. 'Form-function Relations: How Do Children Find Out What They Are?' M. Bowerman and S.C. Levinson (eds.) *Language Acquisition and Conceptual Development*, 406-449. Cambridge: Cambridge University Press.
- Steiner, G. 1967. *Language and Silence*. Hamondsworth: Pelican Books.
- 時枝誠記. 1941. 『国語学原論』東京：岩波書店.
- Vendryes, J. 1921. *Le Langage, Introduction linguistique à l'histoire* [藤岡勝二（訳）『ヴァンドリエス言語学概論——言語研究と歴史』1937、東京：刀江書院]
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』東京：開拓社.
- 養老猛司. 2005. 『無思想の発見』東京：筑摩書房（ちくま新書）

(本学名誉教授)